

## 内モンゴル

D.S. (モンゴル)

文一

要旨： 我々の常識にある「内と外」の関係が物事に必ずしもあるべきなのか。なぜモンゴルは内モンゴル・外モンゴルに区分けされているのか。なぜ内モンゴルと外モンゴルを区分けする線が存在しているのか、「内があれば外がある」という概念自体こそが、ある条件において間違っているのでは、ないか。そのある条件というものを国家間の関係に置き、その過ちを求めて、非常に複雑となりつつある国家間の関係に少し触れてみたい。

キーワード

民族・内モンゴル・アイデンティティ・国家・国際関係



内モンゴル自治区

### 1. はじめに

来日以降、年齢や肌の色などが違う様々な人と会う時、特に日本人によく聞かれるのが「あなたは内モンゴル人ですか、あるいは外モンゴル人ですか」という質問であり、それは「君、中国に住むモンゴル人なのか、あるいはモンゴル国という独立国に住むモンゴル人なのか」と解釈できるだろう。

しかし、ここでは一つの疑問が浮かんできた。そもそもモンゴル民族として統合していたのになぜ、このように内モンゴルと外モンゴルと区分けされ、なぜ区分けの線が存在するのだろうかということだ。

ともかく、「外があれば必ず内がある」という我々が持つ常識を疑ってみながら、それまでまじめに考えたことがない「内と外」の関係を、モンゴル史をさか上って考えたい。歴史をさか上ってモンゴル統治、その分離を知らなければならない。

## 2. モンゴル民族の統合とその分裂

### ● モンゴル民族の統一 — 帝国の出現

モンゴル高原は、東部にタタール部・モンゴル部をはじめとするモンゴル系諸部族、西部にナイマン部などのトルコ系諸部族が割拠<sup>かつきよ</sup>していたが、統一勢力は12世紀まで現れなかった。部族間の争いの中で統一の役を果たしたのがテムジンである。権力を握ったテムジンのもとにモンゴル部は統一され、タタール部・ケレイト部・ナイマン部などの諸部族を次々と破り、モンゴル高原を制覇した。さらに、1206年、クリルタイ<sup>1</sup>でテムジンがチンギス ハーン<sup>2</sup>の称号を受け、モンゴル帝国が誕生した。簡単に言えば、こうして帝国の下でモンゴル部とトルコ系部族、つまり草原にすむ部族が統一を果たした。

### ● モンゴル帝国内の対立の深刻化 — 分離の始まり

モンゴル帝国が拡大するにつれ、宗教・文化の異なる多数の民族を統治する様になったため、支配体制の変革を迫られた。チンギス ハーンは、モンゴルの分封制度に基づいて、北方の遊牧地帯には一族を分封し、帝国内に半独立の小王国をつくらせた。そして、豊かな南方の農耕地帯は直轄領とし、行政長官を派遣して支配した。

しかし、チンギス ハーン死亡以後、皇位継承<sup>こういけいしょう</sup>をめぐる帝室内<sup>みかどしつない</sup>で対立が深刻化すると、一族の小王国はハーン国と称して中央政権から分離し、独自の政権を作っていた。西北にオゴタイ ハーン国、中央アジアにチャガタイ ハーン国、ロシアにキプチャク ハーン国、イラン方面にイル ハーン国が作られた。

“モンゴル高原の側では、中国を支配したモンゴル帝国（元）がモンゴル高原に北走して北元となった後、北元のクビライの王統に従った諸部族と、これから離反してオイラト部族を中心に新しい部族連合を形成した諸部族の二大集団に分かれた。後者はモンゴル語でドルベン・オイラト（四オイラト）と呼ばれるようになり、前者はこれに対してドチン・モンゴル（四十モンゴル）と称される部族集団となる。”（<http://ja.wikipedia.org/wiki/モンゴル>）より

モンゴル高原まで撤退した元朝<sup>げんちょう</sup>は、北元として残り、中国地方に残るモンゴル勢力と連絡して中国の奪回<sup>だっかい</sup>を図るも、1388年に中国からの攻撃を受けて滅びた。その後、内部紛争によりモンゴルに対する圧力が弱まった時、東に北元系のモンゴル部が、西北にはオイラト部が起り、互いに勢力を争った。さらにドチン・モンゴル（四十モンゴル）即ち東にあるモンゴル部がゴビ砂漠から南と北が内、外ハルハと称され、地理的かつ政治的に分離された。こうして、モンゴル帝国が造られるにつれてモンゴル部が統治を果たし、帝国滅亡とともに、統治が失われてしまった。さらに、内部紛争によって勢力が弱まり、新たな

<sup>1</sup>国会で、貴族や役人で構成するものである

<sup>2</sup>モンゴル語にはハンとハーンという単語があり、前半が部族などを主将の意味を指すが、後半が西洋語にあるキング（君主）、日本語にある天皇の意味を指す。

外敵となった清朝の軍事力により、モンゴル勢力が破られ、次第に清朝の支配の下に入った。清朝はモンゴル地域を征服後、管理のためにさまざまな政策を行った。一方で、清朝の下に入ったから、モンゴルが中国と同様に他民の支配を受け、清朝の統治政策によってモンゴルと中国が統治されたと見る傾向があるが、実はこれらの国に対して、中央政府の統治政策というものは、結局、別々に行なわれていた。言い換えれば、清朝において、内外モンゴルを一つの地域と捉え、モンゴル地域への漢族の移住は禁じられるなど中国と分離されたのが事実である。

- モンゴル民族統一—nationalism の始まり

19世紀末ころから、対ロシア緊張関係において、清朝のモンゴルに対する支配政策が大きく変わった。対ロシア防衛ために介入がはじまり、その財政負担などをモンゴル側が負うなどそれまでなかった中国と一体化する政策などで、清朝政府への大きな反発を呼んだ。さらに、中国が辛亥革命で混乱するにつれて、モンゴルにおける独立運動へとつながっていった。1911年活仏ホトクトは反清独立のための援助要請をロシアへ送った。

そして、ホトクトが皇帝に即位し、内務省・外務省などの新機構を設けていった。こうしてモンゴル民族の一時的な皇帝中心とする統一はじまり、内モンゴルなどの独立・統治を求めて中華民国と戦うなど、民族アイデンティティを強調していった。しかし、モンゴル・中華民国・ロシアの3国の交渉が始まることによって、結局、1913年のロシア・中国宣言において、ボグド政権に自治、中国は植民・駐兵をせず行政機構を設置しないこと、外モンゴルでのロシアの商業権益の承認、などが認められた。

この段階ではモンゴルは中国領土の完全なる一部であることが合意されている。その後のキャプタ協議で外モンゴルの高度な自治が認められた。しかし、”モンゴルにおけるロシアの勢力が弱まるにつれ、結局はロシアで革命が起こった末、中華民国が‘中国は植民・駐兵をせず行政機構を設置しない’とした三ヶ国条約をついに破って、軍事をモンゴルに入れ、完全に支配したのだ。こうして、モンゴルが一時的に中国の支配を受けるようになった。

、

- モンゴル独立—モンゴル人民共和国の誕生。

1921年ソビエト・ロシア政権の影響の下モンゴル人民革命が起こり、1924年にモンゴル人民共和国が成立する。この独立を中華民国側が正式に認めたのは、1946年のヤルタ協議においてである。

- 1949年の中華人民共和国誕生と、現在の内モンゴルの誕生

モンゴルは第二次世界大戦が終わると当時のソビエトに対して民族統一を主張したヤルタ協議で、当時の中国政府とアメリカなどが受け入れなかった一方で、内モンゴルは当時の中国中央政府に属する、と認められた。

それに対して、内モンゴルのモンゴル人ナショナリストたちが反発し、1945年内モンゴル人民委員会が結成され、内蒙古人民共和国臨時政府を名乗った。これに敏感に反応した

共産党は、モンゴル人青年の民族主義を利用しながらそれを徐々に自治政府に変えていくという方針で対応した。独立を願う内モンゴルに対して、共産党は、内モンゴル問題はあくまで中国の国内問題と位置づけ、結果として内モンゴルは共産党の区域自治の中へ組み込まれたというのが事実である。

### 3. 内モンゴル人とはアイデンティティなのか。

日本人のする質問、それ自体があいまいなのである。日本人の常識ではどうやら内モンゴル人とは、やはりモンゴル部族または別な民族のように扱われているようだ。ここで一体何があいまいなのかというと、内モンゴル自治区というものが、定住民である部族のアイデンティティとして扱われていることである。

まずは、区域自治とは、特定の少数民族が集住している地区をその民族の「自治地方」と設定して、その中ではその民族の状況に特別に配慮した行政が行われるようにする制度である。確かに、内モンゴル自治区とは必ずしもモンゴル人により、形成されているわけではなく、

“漢族が 80%以上を占め、モンゴル族・ダフル族・エヴェンキ族・オロチョン族・回族・満州族・朝鮮族などがある。” (<http://ja.wikipedia.org/wiki/内モンゴル自治区>)より

現在は内モンゴル自治区の人口を見れば、圧倒的に漢族が多い。つまり、モンゴル族がその特定な地域である自治区でマイノリティーになっているのが事実である。

そして、日本人の常識である内モンゴル人のアイデンティティとは、中華人民共和国が形成されるにつれて作られたものであり、それまであった内モンゴルとはまったく地理的にも属する部族も異なるものである。それは内モンゴル自治区に住む人々全体を称したものである。

### 4. 結論

清朝のもとで内外モンゴルが再統合した一方で、中国とモンゴルが一体化してしまった。上述したように、外モンゴル・内モンゴルという区分けが 19 世紀末ごろ、清朝中央政府の統治の形が変わってくるにとともに進んだ。この区分けはモンゴル側から出てきたというよりも、清朝中央政府の意識によるものと考えられる。しかし、現在の内モンゴル自治区に住むモンゴル人のアイデンティティというものは中華人民共和国が形成後造られたに過ぎない。面白いのは、中ロ敵対関係となった 70 年代、モンゴル人民共和国が自分たちをモンゴル祖先の継承者と主張し、内モンゴル自治区の住民であるモンゴル人に対して中国人という潜在意識があったようだということである。しかしこれに対して内モンゴル自治区に住むモンゴル人たちが自分を中国人ではなく、モンゴル人と主張する。

一体なぜ圧倒的な多数を示す漢族にかかわらず、その地域を内モンゴル自治区と名乗ったのだろう。と私は思うのだが、やはり内蒙古人民共和国臨時政府、これに敏感に反応した共産党は、モンゴル人青年の民族主義を利用しながら、対モンゴル友好関係を悪化させ

ないため、民族主義の反発を避けようとしたのではないか。しかし「今の内モンゴルの概念」には“一体であったモンゴルが中国から独立してしまった”という中国から見た考え方こそが入り込んでいるとしたら、大きな問題だと思われる。

#### 参考資料

参考ホームページ：

- ◇ <http://ja.wikipedia.org/wiki/内モンゴル自治区>
- ◇ <http://www.innermongolia.org/english/index.html>
- ◇ <http://www10.ocn.ne.jp/~okamiya/tosuitaidan.html>
- ◇ <http://forum.asuultserver.com/forum/viewtopic.php?t=6752&postdays=0&postorder=asc&start=26>

参考文献：

「モンゴル史」 Boldbaatar 1999

「モンゴルの二十世紀」 小長谷有紀 2004 中公業書